

ていなかった事は大変恥ずかしい。早速整備作業に取り掛かります。」

ウズベキスタンでも呼応するかのようになり、素晴らしい提案がありました。

タシケント市長から、「建設中のタシケント市の中央公園を、日本の桜で埋められないだろうか?」という提案でした。

今、この公園は、さくら公園と呼ばれているそうです。

二つの実例を紹介しました。

このように日本民族は、古来より、武士道の精神にのっかって行動して参りました。

近頃、ロータリアンにあるまじき行動をしたり、ロータリアンを職業と考えるような心ない

ロータリアンがいる事は、誠に残念です。

皆さん、協力雇用主会という言葉聞いた事はありませんか?

刑務所からの出所者に対して、仕事を与える事に

よって、再犯率を減らしていこうということで、10年程前に、協力雇用主会が結成されました。刑務所出所者のうち、仕事に就いている人と無職の人を比べてみますと、仕事に就いている人の再犯率は7.5%程

あります。無職の人の再犯率は30%程でありますから、実に、4倍のひらきがあります。

私は堺市協力雇用主会の会長をしているのですが、堺市には47社の会員がおります。

出所者の雇用につきましては、いろいろ難しい問題もありますけれども、出所者達を地域社会に暖かく迎え入れて、仕事を与える事によって、犯罪を減らしていく事が出来ます。

ロータリーでは、インターアクトやローターアクト、あるいはライラを通じて、次世代を担う若者達に対して、指導者養成をして参りましたが、今後はロータリーもロータリー活動の一環として、犯罪者に対しても、救いの手を差し伸べるようにしていけたらいいと思っております。



良くしよう! ~ improve our Rotary! ~ 今できることを精一杯

2014~2015年度 和歌山東ロータリーのテーマ

2014年10月9日(木)
週報/VOL.56 No.14
(通巻2654)

「ロータリーに輝きを」LIGHT UP ROTARY 2014~2015年度 国際ロータリーのテーマ

国際ロータリー 第2640地区 和歌山東ロータリークラブ URL: http://www.werc.jp E-mail: info@werc.jp

会長報告

山本 進三 会長



皆さんこんにちは。
早いもので、もう10月となりました。
私が会長になってから3ヶ月が過ぎたこととなりますが、ここまで特に何事もなく順調にクラブが運営できたことは本当に良かったと思います。
これからも、この調子で頑張っていきたいと思っておりますので、残り9ヶ月、どうかよろしくお願

いいたします。
マスコミで東海道新幹線が開業50周年を迎えたとの報道がありました。
開業した1964年には1日約6万人だった乗客数が現在では7倍の42万6千人となり、東京～大阪間の所要時間は4時間から2時間25分に縮まり、最高時速も時速210kmから270kmへ増加したようです。
ちなみに2015年度から段階的に最高時速を285kmまで引き上げていく予定だそうですが、乗客数の多い東海道新幹線ならまだしも、乗客数の少ない東北など他の新幹線では、時速260kmに留まって運転しているようです。
その大きな理由は経済的なもので、路線の設計が時速260km対応であることや車両の摩耗などメンテナンス費が増加すること、スピードを上げて所要時間を短縮しても設備投資や経費増で利用料金が高くなり、乗客数が伸びない可能性が高いことなどがあるそうです。

新幹線も早ければ良いという訳ではないようですね。
10月は職業奉仕月間と米山月間です。
本日は職業奉仕について、2640地区職業奉仕委員長 ^{かみまつせ} 上松瀬 ^{ひろし} 洋さんに卓話いただきます。
上松瀬さま、どうかよろしくお願

幹事報告



- ・2640地区よりインターアクトクラブ海外研修のご案内がとどいております。・・・回覧
- ・和歌山青年会議所よりJCニュースがとどいております。・・・回覧
- ・本日、市内9 R.C. 会長・幹事で和歌山県知事と和歌山市長を表敬してまいります。

委員会報告

青少年奉仕委員会

赤井 雅哉 委員長



恒例のこぼと学園とのみかん狩りを11月23日(日)矢田農園にて行います。
案内は次週配布させていただきますが、ご予約下さいますようお願い致します。

クラブフォーラム 職業奉仕について

国際ロータリー第2640地区職業奉仕委員長 上松瀬 洋さん



職業奉仕というのは、ロータリーの根幹を成すものであります。
ロータリーの友紙の最初に「ロータリーとは」と題して掲載されております。「20世紀初頭のシカゴの街は、著しい社会経済の発展の陰で商業道徳の欠如が目につくよ

うになっていました。
丁度その頃、ここに事務所を構えていた青年弁護士ポール・ハリスはこの風潮に堪えかね、友人3人と語らってお互いに信頼の出来る公正な取引をし、仕事上の付き合いがそのまま親友関係にまで発展するような仲間を増やしたいという趣旨で、ロータリークラブと

ニコニコ箱

上松瀬 洋さん (ゲスト)	御礼をニコニコ箱にいただきました。	角谷 芳伸さん (クラブ職業奉仕委員長)	上松瀬様、本日お忙しい所お越し頂きましてありがとうございます。
野井 晋さん	家内の誕生日にきれいな花をいただきました。有難うございます。		本日欠席しまして申し訳ございません。よろしくお願
松田 洪毅さん	上松瀬様、大変おいそがしい中おいで頂きありがとうございます。	山本 進三さん	上松瀬委員長さま、本日はよろしくお願
中山 恒夫さん	RI2640地区職業奉仕委員長上松瀬洋様をお迎えして。	吉田 篤生さん	上松瀬様、本日は職業奉仕の卓話あり
	本日の卓話よろしくお願	亀田 直紀さん	クールビズも終り、10月スタートです。
	致します。よろしくお願	阪神タイガース応援団一同	今期も終りました。後は広島さん待ち
笹島 良雄さん	上松瀬職業奉仕委員長様、本日は誠に有難う御座います。		です。今後もよろしくお願
細川 竜二さん	先日は、皆様ありがとうございました。		いたします。

本日の累計 35,000円(計10名 11件) [お誕生日お祝い 125,000円] 皆出席表彰 10,000円 その他 521,700円 累計額 656,700円

本日の例会 10月9日(木)

- クラブフォーラム「米山記念奨学会」
- 卓話「ロータリーのお陰で、夢が目の前」
2640地区米山奨学委員長 雪本 孝治さん
2640地区米山奨学生 胡 君平さん
- ピアノ演奏 中井 利枝さん
OUR LOVE IS HERE TO STAY(G.Gershwin)
MY ONE AND ONLY LOVE(G.Wood&R.Mellin)

前回の例会 10月2日(木)

- クラブフォーラム「職業奉仕」
- 卓話 2640地区職業奉仕委員長 上松瀬 洋さん
- ロータリーソング 内畑 瑛造 ソング委員長
「奉仕の理想」

次回の例会 10月16日(木)

- 卓話「紀の国わかやま国体・紀の国わかやま大会」の開催について
和歌山県国体推進局総務企画課副課長 服部 眞悟さん

メイキャップ 敬称略

10月6日(月) 和歌山北R.C. 山東 勝彦、堀岡 忠男

出席報告	会員数 42名(内出席規定適用免除会員14名)	10月2日(本 日)	27名/37名	73%	皆さん、出席してください。
		9月18日(メイキャップ後)	29名/37名	78.4%	

いう会合を考えました」と書かれております。

ですから、ロータリーとは職業倫理を重んずる実業人の集まりです。そして、これこそロータリーだということを象徴的に表しているのが、実は職業奉仕であります。

ロータリーのロータリーたる所以は、職業奉仕の実践であります。

職業というものは、私達が生きていくための所得を得る手段であって、これは自分のためのものではありません。一方、奉仕というものは世のため人のためのもの、即ち自分以外の人のためのものでもあります。

この全く正反対の二つの言葉を一つに合体させて職業奉仕と言っている訳ですから、解りにくい言葉であります。

ロータリーは職業を営む心(金を儲ける心)も、奉仕の心(世のため人のために尽くす心)も、同じ一つの心だと考えます。

即ち、一つの心をもって職業を営み、且つ、奉仕をするのであります。

言い換えれば、「世のため、人のために、奉仕する心をもって職業を営むべし」と言っているのです。

それでは、ロータリアンだけが奉仕の心をもって職業を営んでいるのかと言うと、そうではありません。

世の多くの人達が、ロータリアンでなくても職業倫理を重んじて、職業を営んでおります。

100年前のアメリカはいざ知らず、日本に於いては古来より職業倫理を重んじ、まっとうに職業を営んできた人が大多数であります。

中には食品の産地偽装をしたり、又、レストランやホテルでメニューと違った食材を出したりと、色々な不祥事がありました。

しかし、これらはほんの一部の心ない人達が引き起こした事であります。

この日本の職業倫理を支えてきたのが、実は武士道の精神であります。

武士道とは、武道の事を意味するものではありません。他者を力づくで圧倒することではなく、自分自身の心に潜む弱さに打ち克つ修練を重ねる事であります。

すなわち、武士道とは日本人の道徳であり、行動の美学であります。

人間は、「どういう風に成功するか」という事を考えて行動するよりも、人間は、「どう行動すれば美しいか」という事が重要であります。

この崇高なる精神は、人としての正しい道でありますから、侍だけでなく農民、町人、商人の区別なく、日本人全員に受け入れられたのです。

江戸時代中期に書かれた葉隠という書物があります。

これは鍋島藩といいますから、今の佐賀県の人が書いた物ですが、この葉隠の中に「武士道と云うは、死ぬ事と見つけたり」という一節があります。何の事が分からない言葉であります。間に「人のために」という言葉を入れますと、「武士道と云うは、人の

ために死ぬ事と見つけたり」となります。

こうしますと、ちょっと分かりやすくなります。武士道というものは、人のためになる事であれば、たとえその事で自分が死ぬような事になっても悔いはない。というぐらいの気構えで行動するべきあると教えているのです。裏を返せば、武士道とは人のために生きると言っているのです。

そうしますと、“世のため人のために奉仕する心をもって職業を営むべし”と教えているロータリーの精神と武士道の精神は、真に同一のものであります。

2011年3月11日に東北大震災が起きました。この震災に関する記事がベトナムの新聞に「日本人の誇り」と題して掲載されました。この記事を下に紹介します。

日本人の誇り

話は震災直後の3月16日のことです。まだ年端もいかぬ少年が、ある警察官に見せた日本人の誇りと心優しい気持ちを伝えたいと思います。

震災直後、福島県に派遣された一人の警察官がいた。彼は、在日ベトナム人の両親を持ち、日本に生まれ、人の為に働きたいと帰化して警察官になった。

その彼が派遣された場所は、福島第一原発から25km離れた、ある被災地。

震災と原発事故の最も過酷な状況の中で治安確保のための派遣だった。

しかし、治安は安定しており住民の見回りも機能し、彼は被災者の埋葬と食糧分配の手伝いを多忙な職員に代わって行っていた。

被災者と向き合った初日こそ涙を流したものの、余りに酷い惨状に泣くことさえ忘れ、ただ呆然と仕事をこなす毎日となった。

忘れもしない3月16日の夜、被災者に食料を配る手伝いのため向かった学校で、彼は、9歳だという男の子と出合った。

寒い夜だった。なのに男の子は短パンにTシャツ姿のままで食糧分配の列の一番最後に並んでいた。

気になった彼が話しかけた。長い列の一番最後にいた少年に夕食が渡るのが心配になったからだ。

少年は警察官の彼にポツリポツリ話をし始めた。少年は体育の時間に地震と津波にあった。近くで仕事をしていた父が学校に駆け付けようとしてくれた。しかし、少年の口からは想像を絶する悲しい出来事が語られた。

「父が車ごと津波にのまれるのを見た。海岸に近い自宅にいた母や妹、弟も助かっていないと思う。」と話したのだ。家族の話をする少年は不安を振り払うかのように顔を振り、にじむ涙を拭いながら声を震わせた。悔しさと心細さと寒さで……

彼は自分の着ていた警察コートを脱いで少年の体に

そっと掛けた。そして、持ってきていた食糧パックを男の子に手渡した。

遠慮なく食べてくれるだろうと思っていた彼が目にしたものは、受け取った食糧パックを配給用の箱に置きに行った少年の姿だった。

啞然とした彼の眼差しを見つめ返して、少年はこう言った。「他の多くの人が僕よりもっとお腹がすいているだろうから……」警察官の彼は少年から顔をそらした。

忘れかけていた熱いものが、ふと湧き上がってきたからだ。少年に涙を見られないように。

それにしても、曲がりなりにも大学卒で博士号を持ち、髪にも白いものが目立つほどに人生を歩んできた自分が恥ずかしくなるような、人としての道を小さな男の子に教えられるとは……

9歳の男の子、しかも、両親をはじめ家族が行方不明で心細いだろう一人の少年が困難に耐え、他人の為に想いやれる、少年の時から他人のために自分を犠牲にすることができる日本人は偉大な民族であり、必ずや、より強く再生するに違いない。

自分の胸の中だけに仕舞っておくには、余りにももったいない話だった。いや、誰かと自分の感動を分かち合いたかった。

彼はベトナムの友人に自分の体験した話を打ち明けた。ベトナムの友人も感動して祖国の新聞記者に伝えたのだろう。ベトナム誌の記者は次のような記事を載せて、少年と日本を称賛した。

「彼がベトナムの友人に伝えた日本人の人情と強固な意志を象徴する小さな男の子の話に、我々ベトナム人は涙を流さずにはいられなかった。」「我が国には、こんな子がいるだろうか？」

この記事が大変な反響を呼んだ。かつて、ドラマ「おしん」が大人気になったお国柄だ。決して裕福とは言えないが、ベトナム国民からの義援金が殺到した。悲劇と苦難の元では失われぬ、健気な日本人の美質と負けない力を、一少年の小さな行為から教えられた。

この9歳の男の子の行動こそ、真に武士道であります。日本民族はロータリーに依って奉仕の心を教えられる前に、すでに古来より行動の美学を日本民族のDNAに刻み込まれてきたと言えます。

もう一つ実例を紹介します。

ウズベキスタンのナヴォイ劇場

日本から遠く離れた東欧の国ウズベキスタンの首都タシュケント、このタシュケントにはウズベキスタンで一番有名なナヴォイ劇場というレンガで造られたビザンチン様式の美しい劇場があります。

劇場の左壁のプレートには、ウズベク語、日本語を含む四カ国語で、こう刻まれています。『1945年から1946年にかけて、極東から強制移送された数百名の日本国民がこのナヴォイ劇場の建設に参加し、その完

成に貢献した。』

この劇場は、戦後捕虜となった日本人拘留者の手によって造られたものだったのです。

戦争が終わった1945年、9,760余名がタシュケントに移送され、大きな犠牲を払いながら数年に渡り都市建設に貢献しました。その中で、ナヴォイ劇場の建設に携わったのは、永田行夫 元陸軍技術大尉率いる第四ラゲリ隊でした。

永田氏は当時の事を、こう振り返ります。「無論不幸な事には変わりはない。食事は常に不足して、私も栄養失調で歩くのがやっとの時があった。二人の仲間が事故で亡くなった。ウズベキスタンに送られた25,000人の内、わずか2年で813人の犠牲者が出た事を考えれば、どれほど過酷な環境であったか容易に想像出来ます。そんな過酷な環境の中、日本人拘留者は実直勤勉に仕事に励み、予定工期を大幅に短縮し、わずか2年間で劇場を完成させました。強制労働させられている身分にも関わらず、真剣に責任感を持って仕事に取り組む日本人にやがて現地のウズベク人は好意と尊敬の念を持ち始めました。ウズベキスタン中央銀行の副総裁のアブドマナポフ氏は、子供の頃、日本人が働く姿を見た事があるそうです。子供心に、いつも疲れて帰って来る日本人拘留者を見て同情した彼は、友人と一緒に何度となく宿泊所の庭先に自家製の食物や果物を差し入れに行きました。すると、その数日後に必ず同じ場所に、あるものが置かれていたそうです。それは、精巧に作られた手作りの玩具でした。強制労働で疲れきった拘留者という身分であったにも関わらず、受けた恩に精一杯の謝意を表明しようとした日本人拘留者の行為は、道徳的規範としてウズベク人の間で語り継がれるようになったそうです。」

やがて時は流れ、完成から20年後、1966年4月タシュケントの街をマグニチュード8.0の大地震が襲いました。タシュケントの建造物の三分の二が倒壊してしまっただけでなく、それまでと変わりなく凛として立つナヴォイ劇場を、タシュケントの住民は日本人への畏怖と敬意の念を持って見上げたそうです。

そういう経緯もあってか、多くのウズベク人が子供の頃母親から、「日本人のように勤勉で、よく働く人間になりなさい」と言われて育ったといえます。

又、ソ連時代、日本人墓地を潰して更地にするように指令が出されたそうです。ソ連政府は、捕虜使役で劇場が作られた事を隠蔽したかったのです。しかし、ウズベキスタンの人々はその指令を無視して、ここには日本人が眠っているのだからと、墓地を荒らさず綺麗な状態で守ってくれました。

ウズベキスタン独立後、中山恭子特命全権大使がウズベキスタン政府に、日本人墓地の整備をしたいとお願ひしたそうです。スルタノフ首相(当時)からは、すぐに答えが返ってきました。

「ウズベキスタンで亡くなった方のお墓なのだから、日本人墓地の整備は日本との友好関係の証として、ウズベキスタン政府が責任を持って行う。これまで出来